パスカルの《アポロジー》のプラン復元に関して（Ⅵ）

竹　下　春　日

Sur le plan de l'《Apologie》de Pascal (VI)

前回（V）の論述において，次のことが述べられていた――「……われわれは liasses のタイトルに変更はありえなかったことを論定しうるが，このタイトルの順序そのものにかんしては，パスカルの死直前において彼が意図していたものと真実同じであるか否か，いずれともこれを断言しえないのである。したがってわれわれは，この事にかんし次回において十分なる検討をするであろう」と。それゆえ今回われわれが行うべきことは，『第一写本』中のタイトル表におけるタイトルの順序そのものを検討することである[1]。この問題にかんし，われわれはまず Barnes 夫人の所説を顧ることから始めたい。

I　Mrs. Barnes の所説

Mrs. Barnes は，『第一写本』（Couchoud 版に拠る）に見られる「タイトル表」la table des titres（2個）が，Arnauld や Nicole によるものとする説に反対し，このタイトル表すなわちリヤス（断章綴）の順序を，パスカル自身のものとしている。同夫人はこの理由を，二つのタイトル――《Excellence de cette manière de prouver Dieu》および《Transition de la connaissance de l'homme》の検討の結果として，次のごとく述べている――「……同じこれ

らのタイトルが表中ではただ一語で Excellence, Transition というふうに略されている事実は，極く自然に説明される。つまりパスカルから見ると，リヤスの順序を記すには一語で十分なわけである。リヤスというのは，彼が考えていた著作の諸章というより，まさに記録文書，一種の分類カードと言うべきものである。これには疑いの余地がなない。しかし，ポール・ロワイヤルの Messieurs と呼ばれた人たちが表の作製者だとすれば，この人たちはこれらのタイトルを，そっくりそのままコピストに筆写させる労を，果して省いたであろうか。ところで全部で8個あるタイトルのすべてが，——このうち自筆のものが半数も現存しているのだが——表中では略されているのである。つまり，Que la loi était figurative が，表中では Loi figurative となっているのだ。これはパスカルの肉筆のものから言うと，『写本』の示しているテキスト尊重という事実と矛盾してくるのである。」(2) かようにして Barnes 夫人は，リヤスの順序の決定者がポール・ロワイヤルの人々（前記の Arnauld や Nicole）だとすれば，矛盾が出てくるが，パスカルだとすれば，これら矛盾が一切解消してしまうことを，その論拠としているのである。すなわち同夫人によれば，タイトル表の original があったことになる。

次にタイトル表の《Ennui》と《Raison des effets》との間には，《Opinions du peuple saines》というのがあり，これが「抹消されて」rayé いる事実に着目して，コピストがタイトル選択の際迷ったのではないかという可能性を Blanchet が認めるのに対し，Mrs. Barnes は，これを否定して自説を主張している——「タイトルが余人ならぬコピストの手によって抹消されていること，しかも『写本』の他の個処で使われたのと同じ鋭い入念な線で消されていること，こうしたことは事実である。コピストは迷わなかったのだ，なぜと言って彼は選択しなかったからである。このコピストは有能な筆耕であり，オリジナル中の消されたタイトルを忠実に筆写している，しかもこれをリヤスの最初と末尾で，二回もコピーしているのである。迷ったのは外ならぬパスカルなのであり，当該リヤスのタイトルを選択するのに迷ったか，ないしは Opinions du peuple saines というリヤスを一個作ろうと考え，迷った挙げく作るのを断念したか，このいずれかなのだ。」(3)

さて Lafuma もまた Mrs. Barnes とほぼ同じ論拠により，同様の結論に達している。すなわち，コピストが忠実にパスカルのテキストを筆写した形跡があること，われわれが直前に引用した Barnes 夫人の主張の内容等を，彼の意見の根拠としているが，Lafuma はさらに，Périer がそのポール・ロワイヤル版の序文中で述べたこと――《アポロジー》の材料の並べ方にかんする〈son ordre et sa suite〉をも，彼自身の論拠として附加している（拙論V回のⅢ参照）。さらに最近では，Mesnard も叙上と同様の結論に達している。――「もし『写本』が，パスカル死亡当時における草稿紙の状態というものを留める以外のなにものでもないとするなら，この表はまさにパスカルに由来するものでしかありえないのだ。他方この表なるものは，明らかに写本の目指すところのものであり，写本はこれを描き出しているが，もしコピストないし彼の指導に当った者が仮りに表の作製者であったとするなら，こうした事柄は起り得べくも無かったであろう。」(4) かく Mesnard は述べるとともに，コピストの筆写の忠実さを強調する点において，前二者と軌を一にしている(5)。しかし，果してパスカルの手に成るタイトル表のオリジナルは，存在したのであろうか。

II　われわれの見解（1）

(一)　まずタイトル表のオリジナルが存在したという場合，『パンセ』のポール・ロワイヤル版の編集委員会の編集態度そのものについて，疑念が生ずる。前出の Périer は，次のごとく述べている――「われわれは沢山のパンセのうちから，この上なく明瞭で一番まとまっていると思われるものだけを，採り上げたのである。そうしてなんら加筆変更を加えず，見出されたそのままに読者に供されている。ただ次の事は別として。つまり，脈絡も連関もないまま雑然とあちこちに散在していたものには幾分かの ordre を与え，同じ主題にかんするものを，同じタイトルのもとに整理したのである。そしてこれ以上のあまりにも晦渋なパンセや未完成すぎるものは，一切これを割愛したのである。」(6) われわれは，『パンセ』の編集委員会が刊行の内容を，明瞭なパンセに限った理由を，十分理解することができる。しかしその「幾分かの ordre」quelque sorte d'ordre と称する

ポール・ロワイヤル版の32個のタイトル（《アポロジー》以外のものを含む）とその順序にかんしては[7]，これを不可解とせざるをえない。世人はパスカルの《アポロジー》の構想と内容を知り度がついているのであるから，「その印刷出版を望む世の人々の切願と熱望とに従う」[8] ためには，パスカルの手になるタイトル表に準拠するのが，最も適切であることは明らかである。少くともタイトル表に従って，明瞭なパンセのみを分類収録することの方が，編集委員会独創の〈ordre〉を採用することよりも，better であったはずである[9]。しかし実際において，タイトル表のオリジナルが在したにもかかわらず，これが同委員会によって無視されたことは，われわれの理解に苦しむところである。それゆえ，むしろかかるオリジナルは存在しなかったと，考える方が合理的である。ポール・ロワイヤルの編集委員会は，いわゆるタイトル表なるものがパスカル自身の意図によるものではないことを，知っていたのではあるまいか。

㈡ タイトル表のオリジナルが存在しないという第二の理由は，ポール・ロワイヤル版の叙文中に存する。Lafuma は前述のごとく〈son ordre et sa suite〉の存在を指摘しいるが，〈ordre〉の存在そのものと〈ordre〉を記した文書の存在とは厳密に区別されねばならない。パスカル死後の草稿(リヤス)の状態に或る程度の ordre があったことは，われわれはこれを認めねばならない。なぜなら，コピストの忠実な筆写にもとずくタイトル表は，じつにこれを示しているからである。しかしタイトルの順序を書し記したパスカル自身の手になる一覧表そのものは，存在しなかったものとすべきである。なぜなら Périer は，次のごとく前記序文中で述べているからである—— 〈Car il [Pascal] n'a presque rien *écrit* des principales raisons dont il voulait se servir, des fondements sur lesquels il prétendait appuyer son ouvrage, et de *l'ordre* qu' il voulait y garder; ce qui était assurément très considérable. Tout cela tellement gravé dans son esprit et dans sa mémoire...〉[10]

このわれわれの所論に対し，Barnes-Lafuma-Mesnard 説の立場から，〈l'ordre〉にかんするかぎり，タイトル表のオリジナルが一個存在したという推定は，Périer のいわゆる〈il n'a presque rien écrit〉における〈presque〉なる副詞の挿入の事態と全く一致するという反論が，ありうるかも知れない。た

んに文書の量のみを考えるならば，確かにそうであるが，仮りにかかるオリジナルが一個存在したと仮定するならば，かかるタイトル表の存在価値は，極めて重大である。なぜならパスカル自筆のタイトル表によって，われわれは《アポロジー》の章名とこの章名の順序とを確実に知りうるからであり，このことは事実上《アポロジー》の大筋を確認することになるからである。したがってタイトル表のオリジナルが唯一個存すれば十分であり，同じ内容のものが多数存在しても，大した意義はない。それゆえ該オリジナルが一個存在していたとするなら，Périer は〈il n'a presque rien écrit...de l'ordre〉とは，決して書かなかったであろう。

ところで Périer の文中における〈l'ordre〉なるものは，各リヤス(章)中の諸断章の順序をも意味するのであって，章の順序のみを意味しているのではないとする反論もありうるであろう。しかし各リヤス中の断章の順序は，各リヤス中に綴られた草稿の物理的順序（このリヤスの内部を，上から読むか下から読むかは別として）およびリヤスを構成する草稿中の叙述（断章）の順序によって，既に与えられているのであり，断章の総数712個（Classé および Non classé の合計）中 Classé が過半数の374個を占める以上，諸断章の順序を記した文書にかんするかぎり，〈il n'a presque rien écrit...〉とは到底言いえないことは，明らかである。したがって Périer のいわゆる〈l'ordre〉なるものは，常識上《アポロジー》を構成すべき《章》（リヤス）の順序を指するものと考えるのが，妥当である。それゆえ章の順序を示したタイトル表のオリジナルは，実際には存在しなかったものと見るべきである。だが Périer が〈presque〉なる語を挿入したのは，《アポロジー》の部分的 ordre にかんする若干の断章——例えば La. 29-Br. 60, La. 48-Br. 62, La. 49-Br. 242, La. 308-Br. 430——が存するからであろう。以上によってわれわれは，われわれの主張について十分根拠を有するものと，言いうるであろう。

㈢ (a)——10°《最高善》中の La. 300-Br. 425には，次の叙述が存する。《神だけが，人間の真の善である。……そして，真の善を失って以来，人間にとって，あらゆるものが，何でも真の善として見られるようになり，神と理性と自然とのすべてにあんなにも反する自分自身の破壊に至るまでそうなったのである。》(イ) こ

の叙述中の《そして，真の善を失って以来，人間にとって，あらゆるものが，何でも真の善として見なされうるようになり》は，Non classé の La. 301-Br. 426にも，同様の内容が見られる——《真の本性が失われたので，すべてのものが彼の真の善となるように。》したがって La. 300 と La. 301 とは内容的に連関するが，後者の《真の本性が失われた》ということは，アダムの原罪に因る人間本性の転落を意味するものであるから，La. 301 は 15° bis の《本性の堕落》と密接に繋がることになる。それゆえまた，La. 300 が15° bis と関連することが分る(11)

(ロ)また上掲引用断章（La. 300）中の《神と理性と自然とのすべてにあんなにも反する自分自身の破壊云々》は，La. 132-Br. 439（Non classé）の《腐敗した本性。人間は，彼の存在を形づくっている理性によって行動しない。》と，内容的に一致している。そしてこの La. 132 が，小見出しから言って，15° bis《本性の堕落》に所属することは，明らかである。したがって，La. 132 に関連する La. 300 は当然 15°bis と必然的に連関して来る。——以上(イ)および(ロ)により，La. 300-Br. 425 したがってこれをリヤス中にふくむ 10°《最高善》が，15°bis《本性の堕落》と内容的に密接な関係にあることが分る。それゆえ 10°は≪第二部≫中の 15°bis に近接した位置におかれたはずである。すなわち，10°《最高善》は《アポロジー》の《第二部》Seconde partie(12)に所属していたことが，推定されるのである。

(b)——次に10°《最高善》の章が《第二部》にぞくすることを示すものは，10°中の断章 La. 300-Br. 425（前出）の冒頭に記された小見出しであり，これはパスカル自身の手で《第二部。信仰のない人間は，真の善をも正義をも知ることができないということ。》Seconde partie. Que l'homme sans foi ne peut connaître le vrai bien, nila justice. と書かれている。もしパスカルがこの《Seconde partie》なる文字を不要ないし要訂正と見做したならば，これを抹消ないし加筆を施したはずである。なぜなら，彼は死去に近い時期(1661—1962年)にあっても諸断章の抹消加筆による訂正を怠らなかったからである（拙論 V 回のII参照)。それゆえ La. 300 の《第二部》なる指示は，この La. 300 を綴った10°《最高善》の章が《アポロジー》の《第二部》に所属することを，明らかに示すもので

ある。

以上(a), (b)の論証に拠り，10°《最高善》が《アポロジー》の《第二部》Seconde partie に所属するものたることは，これを疑いえない。しかるに『写本』のタイトル表にあっては，10°《最高善》は《第一部》Première partie に置かれている。この矛盾こそは，タイトル表がパスカル自身に由来するものではないこと，すなわちタイトル表のオリジナルは存在しなかったことの，明白なる証拠である。かようにしてわれわれは，上来叙述して来たところにより（IIの(一)，(二)，(三)），『写本』中に見出されるタイトル表のオリジナルと称されるものは，事実上存在しなかったことを，結論しうるのである。

III　われわれの見解（2）

(一) IIにおいて，われわれは『写本』中におけるタイトル表のオリジナルの存在を否定した。それでは Mrs. Barnes, Lafuma のおよび Mesnard の指摘している《Opinions du peuple saines》が抹消されたまま，二度も（第一写本において）筆写されている事実は，いかに説明されるべきであろうか。コピストがパスカルのテキストに忠実だったことは，諸家によって確認されている。この事実は，われわれにオリジナルの存在に対する強い現実感を与える。しかしタイトル表のオルジナルが在存しえぬ以上，これ（タイトル表の源泉）はリヤス中に求められねばならない。該抹消タイトルは，4°《Ennui》と5°《Raison des effets》の間に介在している。したがって，このタイトルは一枚のカード上にrayer されたまま，5°の冒頭ないし4°のリヤスの末尾に綴られていたと，推定せられる——丁度14°《Transition》の末尾に，15°《La Nature est corrompue》が綴られていたように。このタイトルが記されたカードは，タイトル抹消のゆえに，人々の関心を惹かぬまま紛失の運命に遭遇したのである。こうした事柄は，十分ありえたことである。なぜなら，パスカルの少からぬ草稿が紛失しているのみならず，Barnes-Lafuma-Mesnard 説におけるタイトル表のオリジナルさえも——その重要さにもかかわらず——紛失しえたからである。それゆえわれわれの所謂カードの紛失は，極めて自然であると言いえよう。

㈡タイトル表中の〈titres〉の若干が，省略の形ちで記されていることは，タイトル表作製の目的がタイトルの順序を保持することにあって，タイトルそのものの完全なる筆写にあるのではないこととして，理解される。蓋し完全なる筆写は，各リヤスのタイトルの筆写によって既に行なわれている以上，手数を省いたものと見做しうるからである。したがって省略したこと自体が，コピストのテキスト尊重の態度と矛盾するという論法は成り立ち難い——Barnes 夫人は，この矛盾はタイトル表のオリジナルの省略法をそのままコピーしたことによってのみ，説明しうるとしているけれども。そうしてこの省略の仕方が，ポール・ロワイヤル編集委員の了解のもとに行われたであろうことは，われわれの容易に想像しうるところである。したがってタイトル表中のタイトルの或るものが，その省略の仕方において，リヤス中のタイトルのそれ（パスカル自身によるもの）と一致することは，なんら偶然ではなく，編集委員会の方針を代表するメンバーの指導に従ってリヤス中の省略法をそのまま用いたことによるものとして，これを説明しうるのである。かようにしてわれわれはタイトル表のオリジナル存在の仮説を，不要なるものとして否決するのである。

㈢最後にわれわれは，われわれ自身の説についての根本的問いを問い，かつこれに答えなければならない。Périer が前掲の序文中で，次のごとく述べていることは，既に著名なる事実である——〈La première chose que l'on fit fut de les [de petits morceaux de papier] faire copier tels qu'ils étaient, et dans la même confusion qu'on les avait trouvés.〉[13] かようにパスカル死後の草稿紙葉のありのままの状態をコピーしたものが『第一写本』la Première Copie であり，しかも前述のごとくコピストは〈忠実に〉fidèlement[14] 筆写しているのであるから，liasses の〈ordre〉が死後の状態を正しく伝えていることは，これを疑いえない。他方われわれの研究は，写本中にコピーされたタイトル表のタイトルの順序がパスカル自身によるものではないことを，示している。この矛盾は，いかにして説明されるであろうか。しかしこれは見掛けの矛盾であって，真の矛盾ではない。コピストが筆写したのは，パスカルの死後の草稿であって，死直前のそれではない。言いかえれば，リヤスの順序は，パスカルの死からコピーが開始された時点までの間に，何者かの手によって乱されたのであ

る[15]。この何者かは，事の性質上パスカル関係の人々やポール・ロワイヤルの編集委員会のメンバーではありえぬであろう。かかる人物は，草稿披見の時期の早さから見て，ペリエ夫人が『パンセ』の原稿閲覧を許さざるをえなかった程の社会的地位と，親交関係とを合わせ持っていたものと，想像される。われわれはもちろんこの人物を具体的に断定しえないが，もし fr. La. 713-Br. 11 が Sablé 侯爵夫人の作であるとすれば[16]，同夫人が件の人物でありうる蓋然性は相当高い。彼女が，自分の作品が噂に高い《アポロジー》中に利用されうることを承知していたとするなら，至大の興味を抱くことは決して不自然ではあるまい。ともあれこうした人物が，悪意からではなく，たんなる不注意から，リヤスの順序を乱したであろうことは，容易に想像しうる。なぜなら，リヤスには番号が附されていないからである（この理由については，前回参照）。コピーする以前に，一度び順序が狂うなら，復元は容易ではない。かくして『第一写本』中のリヤスの順序は，乱れたままコピストに筆写された順序である。こうしてタイトルの ordre の問題は，依然として謎の闇の裡につつまれているのである。

〈注〉

(1) かかる表——いわゆる〈la table des matières〉——は，第一写本中に二個，第二写本中に一個存存する。大体において，内容に不同はない。

(2) Annie Barnes, 《La table des titres de la copie des Pensées est-elle de Pascal ?》 (French Studies, Vol. 7, Oxford, April 1953, p. 143).

(3) ibid., p. 114.

(4) Jean Mesnard, 《Aux origines de l'édition des 《Pensées》: les deux Copies》 (Les 《Pensées》 de Pascal ont trois cents ans, Clermont-Ferrand, 1971, p. 25).

(5) ibid., p. 26.

(6) Rascal, OEuvres complètes (Ed, du Seuil), p. 498).

(7) Voir Lafuma, Histoire des Pensées de Pascal, Paris, 1954, p. 113-114.

(8) OEuvres complètes, op. cit., p. 498.

(9) 実際上かかる分類の仕方には，なんの困難も伴わない。これは Lafuma が，Delmas 版において行ったところである——彼は明瞭なパンセのみならず，全断章（《アポロジー》に関する）について行っている。

(10) OEuvres complètes, op. cit., p. 495. なお Topliss は，筆者の引用個処とは異る Périer の叙述を論拠とし，筆者とほぼ同様の結論を説いている——〈……and had one [table of contents] existed it is scarcely credible that Etienne Périer

should describe the fragments as having been found in bundles "mais sans aucun ordre et sans aucune suite,"〉 (Patricia Topliss, The Rhetoric of Pascal, Leicester University Press, 1966, p. 162).

(11) われわれの論旨は，La. 300 は La. 301 の後半（真の善の喪失）に，15° bis は La. 301 の前半（真の本性喪失）に，それぞれ連関していることを論拠としているが，これに対し La. 301 の前半と後半との必然的関係は，必ずしも明瞭ではないとする反論がありうるが，しかしこれはパスカルの神学的立場から観るとき，殆んど常識的でさえあり，問題とするに足りない。なぜなら La. 301 の前半の内容たる「真の本性の喪失」ということと，後半の「真の善の喪失」ということとは，アダムの神（真の善——La. 300 参照）からの離反としての人間本性の堕落（神の創造時における人間本性の無垢状態の喪失）に由来する点で，等根源的であるからである。この事を示すパカルの叙述は，La. 309-Br. 430 中の神の言葉（擬人法による）に明白に見出される——〈だが，今あなたがたは，私があなたがたを形づくったときの状態にはいないのである〔真の本性の喪失〕。私〔神〕は人間を清く，罪なく完全に創造した。彼を光と知性とで満した。彼に私の栄光と驚異とを伝えた。……だが，彼はこれほどまでの栄光を，思い上がりに陥らないでは保っことができなかったのである。彼は自分で自分の中心となり，私の助けから独立しようと欲した。彼は，私の支配からのがれ出た〔真の善の喪失〕。そして自分のなかに幸福を見いだそうとの欲求によって自分を私と等しいものとした……〉。

(12) 〈アポロジー〉の〈第二部〉にかくしては，Lafuma は 12° 〈Commencement〉以降を指示ししいるが[1]，Mesnard は「第一部と第二部の分れ目は，われわれの意見では，『写本』の第十章の終りにある。」と述べている[2]，すなわち彼によれば 11° 〈A. P. R〉が〈第二部〉の始まりとなる。

1) Pascal, Pensées sur la religion (Éd. du Luxembourg), Paris, 1951, t. I (Textes), p. 115.

2) J・メナール著『パスカル』(安井源治訳), p. 182.

(13) OEuvres complètes, op. cit., p. 498.

(14) Barnes, op. cit., p. 144.

(15) Barnes 夫人は，パスカルの死後の草稿紙葉の状態について，〈La *copie* des *Pensées* nous a fidèlement préservé l'état des papiers de Pascal au lendemain de sa mort.〉[1] と述べているが，これは恐らく Périer の〈.....les faire copier tels qu'ils étaient, et dans la même confusion qu'on les avait trouvés.〉（本文中に引用）なる記述を，かくは解したのであろうが，われわれはこれに対して多大の疑念を抱かざるをえない。もし『写本』中のタイトル表が，厳密なる意味においてパスカルの死直前の状態を保存しているならば，タイトル表のオリジナルの有無にかかわらず，ポール・ロワイヤルの編集委員会は，その『パンセ』の初版本において，文意明瞭なる断章のみをタイトル表にしたがって分類したであろうことを，われわれ

は茲で再言しておき度い。特に委員会のメンバー全員8人が[2]，かかる分類法に一人も気附かなかったとは，到底想像しがたいところである。したがって同委員会は，表がパスカルに由来するものでないこと，すなわち表中の諸タイトルの順序は既に乱されていたことを，当然承知していたものと推測される。

1) Mrs. Barnes, op. cit., p. 140.

2) 8人のメンバーは，次の通りである——

——Duc de Roannez, Arnauld, Nicole, du Bois, Filleau de la Chaise, Brienne, Tréville, Etienne Périer (Lafuma, Histoire des Pensées de Pascal, Paris, 1954, p. 33, note 2).

(16) Voir Pascal, Pensées (Éd. Tourneur et Anzieu), Paris, 1960, t. II, p. 169, note 1. (註了)